

ブレーメン経済工科大学  
交換留学報告書

静岡県立大学 国際関係学部  
国際言語文化学科 4年 ヨーロッパ文化コース

約4ヶ月半のブレーメンでの生活は、日本とドイツでの生活環境の違い、多様な人種の中で生活すること、言語教育の難しさなど多くのことを学ぶ貴重な経験となった。その中でもまずは交換留学先であるブレーメン経済工科大学での学校生活について報告させていただく。

この大学で私はツーリズムを主として学ぶ学部にも所属した。私が受けていた講義は主にツーリズムを他国との比較、または環境面から考える講義とドイツ語を学ぶ語学コースである。ツーリズムの講義ではドイツ人の余暇の過ごし方、ツーリズム産業の経済効果、観光客数増加によって問題視される環境問題とその対策、現地の住民への社会的影響などをドイツ人学生と共に英語で講義を受けた。特に印象的であったのは、ツーリズム産業と環境問題の関連性である。山などの自然な場所が観光地としてあげられることの多い日本でもドイツ同様に観光客によって元からあった自然が破壊されたという事例も耳にしたことがある。都会や田舎に限らず観光客誘致を促進する場合、まずはその際の観光地となりうる土地への環境的リスクが必ず伴うことを考えたうえでツーリズム産業を盛り上げていくことが大事であるということを知った。語学コースは各クラス平均10人～15人の少人数制であり、国籍もバラバラな学生がレベルに沿って集まって受講する。基本的に毎回の授業でひとつの文法テーマがあげられ、それに関する練習問題、ペアワーク、短い会話文の練習などを行っていた。さらに、ドイツ語を勉強するうえで欠かせないのがタンデムパートナーである。タンデムパートナーとは外国語を勉強する者同士がペアになってお互いの言語を教え合う制度である。私はだいたい週に3日タンデムをし、授業でわからなかったことを聞いたり、日常生活でのドイツ語の疑問を尋ねたり、ドイツ語と日本語を交えて趣味の話をしたりしていた。さらには、若い世代がよく使う言葉や方言、丁寧な言葉表現と友達同士における言葉表現のちがいはタンデムのおかげで学ぶことができた。タンデムは義務的にペアが振り分けられるわけではなく、気軽にどちらか一方が「タンデムをやりようよ」と声を掛けて始まることが多いので友人を増やすきっかけにもなりやすい。また、タンデムをやることで私が感じたのは言語教育の難しさである。お互いの言語では十分に補うことができない言語表現があったり、ドイツ語独特又日本語独特の文法があったり、当たり前のように話している母国語を文法的に説明することの難しさと全くジャンルが違う言語を学ぶことの難しさを知った。

次に私の研究テーマに則した報告をさせていただく。私のゼミでの研究テーマは「移民に対する言語教育において効果的な政策とはなんであるのか」である。以前の調査において移民対象のドイツ語受講講座が政策の一環としてあるにも関わらず、彼らの言語能力が劣っているため限られた職に就くことしかできない、移民の子供たちが幼い頃から他の生徒に比べてドイツ語を学ぶ機会が少ないために言語能力が劣っているという結果が出ていた。後者の移民の子供たちの言語能力に関して今回は述べる。わたしが通っていたブレーメン経済工科大学で出会ったドイツ人学生の多くも両親が移民であるという人が多くいた。両親がパキスタン人、ロシア人、タイ人、ベトナム人、コソボ人など国も地域もバラバラ

である。彼らつまりは移民の子たちであるが、大学で学ぶ学生であるので母国語となるドイツ語は勿論、英語を話し、現在は日本語を学んでいるという学生たちである。よって言語能力において劣っている部分は彼らからはみてとることはできない。しかしその他にも街中の飲食店ではトルコ人をはじめとする移民を多く見かけたが、彼らの多くもドイツ語を流暢に話し、たまに英語も話していたという印象である。ドイツといっても育ってきた地域や環境によって差は生じると思うが、移民の子の言語獲得問題は減少しているのではないかと考える。

最後にわたしがドイツ人学生との会話の際に最も印象的であった出来事に関して述べる。その学生は以前日本に1年間留学していた学生であり、日本語も非常に上手であったので一度私は日本で働きたいのかと尋ねたことがあった。しかし彼は「日本は好きだけど働きたくはない。だって日本ではいつまでたっても外国人だから」と答えたのである。自分がどれだけ日本語を話すことが出来ても、見た目が西洋人であるのでお店に行けば英語で話しかけられるのだそうだ。ドイツは移民が多いからこそ見た目への偏見が少なく、見た目がアジア人であろうと肌の色が違おうとドイツ人なのである。日本は移民も少なく島国であるがために外国人の流入が元々激しかったわけではないので、仕方がないことなのかもしれない。けれども実際私も日本で欧米人をみかけると、英語で話しかけなければいけないと無意識に思っていたということに気づいた。彼のように日本が好きであるという学生にそう思われるのは非常に悲しいことである。彼と話して自分が無意識に持っていた偏見にも気づかされ、外国人との接し方やコミュニケーションについて考えさせられる良い機会になったと思う。

そして約4ヶ月半のドイツでの留学生活で、日本語と日本文化を学ぶドイツ人学生たちと関わるのが一番多かった。だからこそ日本文化を、日本の歴史を、見つめ直すことができた。自分が知らない日本の良さをドイツ人に教えてもらうのは非常に楽しかった。日本について、ドイツについて、自らの考え方について、考えさせられることの多かった留学生活であった。この経験をこれからの自らのステップアップにつなげていきたい。以上で報告をおわらせていただく。